

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】 守田まどか

【所属】 (助成決定時) 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

【研究題目】 オスマン帝都イスタンブルの街区：多宗教社会における地縁的結合関係 (18-19 世紀)

【研究の目的】

本研究の目的は、宗教・民族・社会的に多様な住民を内包したオスマン帝都イスタンブルを研究対象とし、都市の重要な構成要素であった街区の実態を明らかにすることである。オスマン帝国期のイスタンブル (1453-1922 年) において街区は、宗教・宗派別に形成された住民共同体であり、都市行政の末端組織としても機能したと理解されてきた。しかし従来の研究では、史料上の困難に加え、街区の果たした社会的役割や行政的機能を歴史的に考察するという視点の欠如から、時代による変化を視野に入れた詳細な検討が行われてこなかった。宗教的・文化的な帰属と地縁にもとづく共同意識が、完全には一致することなく緩やかに重なり合う場であった街区において、人々がどのように繋がり、また、様々な政治的・社会的情勢の下で人々の紐帯が歴史的にどのように変遷したのかを、文書史料の実証的分析にもとづき考察することで、現代社会における国際相互理解を深めるための知見を導き出し、持続可能な多文化共生社会の構築に貢献することを目指す。

【研究の内容・方法】

オスマン帝国史研究において、街区は、都市の重要な構成要素として古くから研究者の注目を集めてきた。古典的な研究では、いわゆる「イスラーム都市」論の影響の下、画一的で静態的な街区像が描かれてきた。ここ 20 年間で、建築史や歴史人口学の分野における進展により研究状況はある程度改善された。しかし、オスマン帝都の統治において、また、帝都に生きた人々にとって、街区はどのような意味をもったのか、という問いは解明されていない。

このような研究状況に鑑み、トルコ共和国樹立後の抜本的な市政改革による街区共同体の解体までを視野に入れつつ、街区の実態を明らかにすることを目標に掲げ、研究に取り組んできた。東京大学大学院に提出した博士論文では、従来の研究で自明視されていた街区の共同性を歴史的に考察した。その考察のなかで報告者は、宮廷のイスタンブルへの帰還にはじまり、度重なる反乱を経験した 18 世紀前半の帝都の治安行政や社会秩序の管理において、本来はムスリム住民の指導者だったイマーム (モスクの導師) の影響力が増したこと、その結果、非ムスリムの街区がムスリムの街区に付随的な存在として位置づけられるようになったことを明らかにした。さらに、そうしたムスリム街区と非ムスリム街区の非対等的な位置づけが、宗教的帰属を超えた地縁的共同性の成立する原動力になったことを論じた。

本研究課題は、報告者によるこれまでの研究で得られた知見を踏まえ、街区の複合構造についての考察を深化させるものである。近年のオスマン帝国史研究では、18 世紀以降、国家が社会に対する管理を強めたという側面が強調される傾向にある。これに対して本研究は、このような国家・社会関係の変容を、地域社会で取り結ばれる人間関係のレベルに降り立って分析する。すなわち、本研究は、近代移行期におけるオスマン社会の変容という問題に、人々の紐帯という視点からアプローチすることにより、オスマン帝国史研究に新たな視座を提供することが期待される。さらに、本研究は、帝国の統治が個の把握へ向かう過程における地域社会の展開を考察するという点で、個・社会・国家の関係という普遍的な課題をも含んでいる。

【結論・考察】

オスマン帝都イスタンブルの統治における宗教共同体の位置づけが、都市民の共同意識のあり方とどのように影響し合っていたのかを明らかにするため、具体的には主に以下の性質の異なる史料に現れる街区／教区を

比較分析した。

- ・ シャリーア法廷で非ムスリムの自称や身元確認として用いられる街区／教区
- ・ 税台帳に現れる非ムスリムの街区／教区
- ・ 法廷が中央政府に提出した上申書に添付された街区一覧（1741年）
- ・ 人口調査の単位となった288街区（1829年）

分析の結果、18世紀イスタンブルにおいて、非ムスリムの街区は徴税単位として存続したが、帝都の治安行政において単独で機能することはほとんどなかった様子が浮かび上がってきた。非ムスリムの代表によって束ねられる非ムスリムの街区／教区は、イマームとその会衆を基盤とする、より大きな行政単位としての街区のなかに組み込まれていた。以上の考察は、近代移行期における帝国の統治構造の変容が、人々の結合関係の変容とどのように連動していたのかを明らかにするための土台となる。